

同志社大学
2015 年卒業論文

論題：シングル男性の男性意識のありかた—ジェンダーと家族意識の視点から—

社会学部社会学科
学籍番号：19121063
氏名：高橋 理
指導教員：立木 茂雄
(本文の総字数：21050 字)

要旨

論題：シングル男性の男性意識のありかた—ジェンダーと家族意識の視点から—

学籍番号 19121063

氏名 高橋 理

性役割分業意識や家族の在り方の変化の中で男性の意識は変化しているという。しかし、変化した男性、「新しい男性」はどのように出現しているのだろうか。と疑問を持った。その中で先行研究からこれまでの家族観の下で、男性の意識を決定しているものは家族意識、ジェンダー意識であると知った。そこでこの結果は家族の在り方の変化から増加している、異なる家族の形を持っているシングル男性にも適応できるのか。シングルであることで男性意識の在り方に変化はあるのか調査を行った。

そこで本研究では同志社大学のシングルの男子学生を対象に家族観、ジェンダー観、男性意識に関する調査票調査を行い、結果的にシングル男性においても男性性は家族観、ジェンダー観によって影響されていたが、その家族観によって現れる男性意識にも違いが生じることが確認できた。

キーワード：男性意識、ジェンダー、家族観

目次

序章	4
1. 先行研究	4
1.1 男性研究	4
1.2 家族意識	7
2. 研究方法	10
2.1 調査の概要・対象	10
2.2 用具、指標、調査項目	10
2.3 分析方法	13
3. 調査結果	14
3.1 回答者の属性	14
3.2 記述統計	14
(1) 男性の志向性	14
a) 権力志向	14
b) 優越志向	15
c) 所有志向	16
(2) ジェンダー意識	17
(3) 家族意識	17
a) 〈直系家族〉意識	17
b) 〈近代家族〉意識	18
c) 〈合意制家族〉意識	19
3.3 重回帰分析	20
4. 考察	24
4.1 記述統計に関する考察	24
4.2 重回帰分析に関する考察	26
終章	27
参考文献	28

序章

今、男性のあり方は変化しているといえるだろう。これまでの男性は社会的に求められる性役割分業の元に、「家庭を支える一家の大黒柱」としての役割、つまり家族の中心として肉体的、精神的に強く、責任感のある男性であることが求められてきた。しかし、性役割分業意識への疑いや女性の社会進出などのジェンダー観の社会全体での変化の中で、男性はそのあり方を変えている。この変化は2009年には恋愛に対して消極的な男性のことを表す「草食男子」という言葉が「ユーキャン新語・流行語大賞」に選出されるほど流行したことや日本全体での晩婚化、非婚化として日本の中で大きな潮流として認識されているといえるだろう。また、家族社会学者の落合恵美子はその著書「21世紀家族へ」の中で男性の変化を「新しい男の出現」として紹介している。

そうなのです。出てきたのです。「新しい男」たちが。ただし、ようやく現れた「新しい男」は、女性たちのムシのよい期待とはちょっと違っていました。男は変っても給料だけは運び続けてくれるはず、と八十年代の女たちはタカをくくってはいなかったのでしょうか。しかし、性別役割を疑うという風潮から若い世代の男性たちがまず学んだのは、男のいちばんつらい役割、すなわち妻子を養うという役割から解放されてもよい、ということだったようです。女と男の役割の再編成は、女たちのもくろみをも超えた新段階に突入しつつあります。(落合 1994:229-230)

このように男性の結婚観や家族観、ジェンダー観といったものは従来では当たり前のものであり、このように扱われてきた「家庭を支える一家の大黒柱」としての役割から離れ、変化を起こしているといえるだろう。また、落合(1994)は男性に限らず、家族も変化していると紹介している。日本での離婚率の上昇、合計特殊出生率の減少、婚姻率の減少、晩婚化などの「第二の人口転換」と言われる社会変化から、20世紀までの家族を単位とした社会から「個人を単位とした社会」に変化していかなくてはならないとしているのである。しかし、この変化の中で、社会単位の個人単位への変化と、男性意識の変化との両変化の中で、シングルの男性はどのような男性像を持っており、それはどのような変数に規定されているか、また、どのようなシングルの男性は「新しい男性」である傾向にあると言えるのだろうかと考えた。また、このような変化の渦中にある若い世代では本当に男性の意識は変化しているのだろうか。変化を起こしているのならどのような変化であるのだろうか。また、第二の人口転換の中で、シングルという属性に注目するということは将来的に増加するのであろう人々への注目であり、その人々を研究することには意義があると言えるのではないだろうか。以上を踏まえ、本論では家族観の変化、ジェンダー観の変化と男性の意識の変化について考えていく。1章ではこれまでの男性研究、家族研究についてみて行き、2章では本研究の概要、調査方法について書く。3章では調査結果について詳細に見ていく。最後に4章では今回の調査結果について考察を行う。

1. 先行研究

1.1 男性研究

(1) ゴールドバーグの研究

アメリカの男性学研究者ハーブ・ゴールドバーグは、これまでの男性のコミュニケーシ

ジョン不全や仕事に過度に没頭してしまい、家庭での様々な軋轢を生んでしまうこと、男性の自殺率の高さなど男性の問題に関する研究で、男性の持つ性質からの説明を行っている。ゴールドバーグは男性問題を、男性に社会から与えられる男性としての役割を演じなければならない。というプレッシャー、それによって引き起こされる様々な男性のコミュニケーション不全、役割に合わせなければならないという生き方の制限、また、役割に反する行動の忌避、社会進出などの女性の環境変化に伴う女性との関わり方の変化などから説明している。ゴールドバーグは特に男性かけられているとされるプレッシャーを 8 つに分類して説明している。

1 つ目は「男性は常に自己証明をしなければならない」というものである。例えば誰かに馬鹿にされたり、誇りを傷つけられたりするようなことがあれば、これに絶対に反論しなければならない。反論をしない、誇りのない男性は男らしくない男性である。また、例え怪我をしたり病気になるたりしたとしても、それらを理由にして休んだりしてはならない。男であるなら我慢をしなければならない、とするものである。2 つ目は「自分の欲求や感情はできるだけ抑圧しなければならない」というものである。これは、自分の体調に気を使ったり、酒量を控えたりすること、また、休んだり眠ったりすることは受け身の行為であり、女性的な行為であり、男らしくない行為である。とするものである。3 つ目は「常に重い責任を背負わなければならない」である。これは、男性は仕事や自殺をすることにおいても失敗することは許されず、成功し続けなければならないとするものである。4 つ目に「男性は善い行いの対価として女性とのセックスが許される」というものである。女性の求める男性像に自分をより近づけることによって女性に気に入られることができ、セックスを許される。このため男性の行動は女性によって強く影響されているということが出来る。5 つ目は「自然で表情豊かでありたいという自然な欲求は抑え込むべきである」というものである。男性は自分の感情を制御できる成熟した夫でなければならないとされている。6 つ目は「男性は女性に深く依存し、男性は脆いものであるが、決してそれを認めてはならない。」というものである。ゴールドバーグは、男性は決して認めることはしないが、自分は女性に対してコミュニケーション取らなくても自分の感情や気持ちを理解してくれることを期待している。とも指摘している。このことからゴールドバーグは男性を「がんばりやのサムライ男」この期待にやられてしまう女性を「大地の母」と名付けている。大地の母に依存してしまうことで男性のコミュニケーション不全はより強くなる。7 つ目は、「自分の中にある憤怒、抵抗、退屈、葛藤などの感情を他者との関係の中で処理するべきではない。」である。女性解放などの時代の変化に伴ってこれまでの男性中心の規範との間で様々な軋轢が生じてしまうが、これらの葛藤は外部に漏らすのではなく自分の中で解消していくべきである。8 つ目は「女性との関係において、自分の都合ではなく女性がどのように感じるのか、女性がどのように行動したいのかを判断基準にするべきである。」男性の行動は女性を基準に決定づけられるべきであり、自分を基準としてはならない。自分のことは後回しにするべきである。というものである。以上の 8 つからなる男性にかけられるプレッシャーによって男性の行動は規定されており、男性問題の原因になっている。としているのである。

また、ゴールドバーグはこれらの男性へのプレッシャーに対して以下の「12 の処方箋」という形で社会的なプレッシャーから逃れ、男性自身に変化していくことを促している。

1. 性差別者からの男らしくあれという脅しに屈しないこと、
2. 仲間を作ること、
3. 「大地

の母」を抜け出し、人格を持った女性とむすびつくこと、4. 男性の女性的側面を回復すること、人格の中で否定されてきた女性の部分の表出を楽しむこと、5. 束縛的な伝統的な役割の契約を先延ばしにすること、6. 感情が現実を認識させてくれるものであることを認めること、7. 自分の子供になること、8. 世界ではなく、自分自身を変えること、9. 「男らしさ」「女らしさ」は条件づけられた現象であり、常に再定義されるものであることを知ること、10. 女性の社会進出を応援し、主張すること、11. 助けを乞い、願うこと、12. 自分の人生を自分の物にするものの12項目である。これらの処方箋によって男性問題の解決をゴールドバーグは提案している。これは大きく分類して「男性が社会に与えられる役割から解放されること」「健全なネットワーク、コミュニティを持ち、コミュニケーションを行うこと。」「女性の社会進出を認め、応援すること。また、これまでの女性への依存を認めること」の三つに大別できるといえるだろう (Herb・Goldberg 1981)。

(2) 伊藤公雄の研究

日本の男性学研究者である伊藤公雄は、ゴールドバーグの研究を基礎として、これまでの男性の性質というものを「権力志向」「優越志向」「所有志向」という男性の持つ三つの志向性として説明をしている。現代の男性問題は男性がこれらの三つの志向性を社会的に求められていること、これらの男性性を持つことに自身も強いこだわりをもってしまっていることが原因であるとしている。以下にこの三つの志向性を詳細に見ていく。

一つ目の「権力志向」では、男性はより強い権力を持ちたいとする心理傾向や自分の意思を通したい。他人に受け入れさせたい。とする心理傾向である。これは権力を持たない、持とうとしない男性は男らしくないとする志向性であるとも言える。次に「優越志向」であるが、これは他人よりも知的、性的、肉体的に優秀でありたい。様々な競争において勝利したい。優秀でない、勝利を求めない男性は男らしくない。とする心理傾向であるとしている。最後に所有志向であるが、これは多くの物質、金銭を所有したい。裕福でありたい。自分のコントロール下に置きたい。そうでなければ男らしくない。とする心理傾向であるとしている。

これらの心理傾向が男性の中で「男らしさ」「男のメンツ」といったものになり、これらの心理傾向に反する行動は「男らしくない」行動であるとして制限してしまっているとしている。例えば、女性との関わりの問題では女性の社会進出を「女性からの自分の領域への侵略」と捉えてしまい女性を攻撃したり、女性をモノ的に所有し、コントロールしようとしたりするという。また、男性同士の関係においても、他人に弱みを見せてはならない。弱い男性は男らしくない。という考えから自分の悩みを自分の内に抱え込んでしまったり、家族内でのコミュニケーションの不全の原因となっていたりしているとしている。このように人に弱さを見せず、競争に打ち勝ち、女性や金銭などを所有、コントロールしなければならない、そうでなければ男らしい男ではないという志向性が現代の男性問題の原因になっているとしている。職場、家庭内での男性問題では同僚との競争意識や仕事ができない男は男らしくないという意識が男性の仕事中心主義や家庭での不在の原因になってしまうことや、その結果としての熟年離婚、定年離婚、定年退職後の夫の家庭内での居場所の喪失などを説明している。また、学校での男性問題ではいじめ被害にあっている男子学生が学校の中においても「男らしく」あることが求められる中でいじめによって自身の「男らしさ」が傷つけられることから説明している。このように伊藤は男性の志向性によって男性は行動を規定、制限され、結果的に男性問題が引き起こされているとしている。

これに対して伊藤は男性問題を解決し、男性が現在の「仕事中心主義」から「生活中心のゆとり社会」への変化を望むのであれば、男性自身の変化が必要であるとし、男性による女性の社会進出を応援していくこと。女性を対等な一個人として認め、女性に対する精神的、生活的依存を認めること。などの女性とのかかわり方の変化。また、男性同士がつながり、ネットワークを持つ事によってコミュニケーションを持つこと。女性を認めることによって夫婦間でのコミュニケーションを持つことなどのコミュニケーションの変化。などの変化をしていかななくてはならないとしているのである（伊藤 1996）。

(3) 男性研究

以上の 2 人の研究を見てきたように、これまでの男性研究では男性問題は男性自身の問題として語られ、男性自身の意識や社会的に与えられた役割に沿った行動をしなければならないというプレッシャーとそれに伴う弊害によって引き起こされており、それ等を解決するためには男性が健全なネットワークを持つこと、「男らしさ」から解放されること。女性に対する見方を変えることが必要であるという点で基本的な部分では一致していると言えるだろう。しかし、アメリカのゴールドバーグ研究は比較的個人の問題としても男性問題を語っていることに対して、日本での伊藤研究では家庭や職場などのコミュニティの中での問題として扱っているといえる。

また、これら両研究で提示されている男性問題の解決方法は男性の社会的に与えられるプレッシャーからの離脱を促しているが、このプレッシャーは近代の社会規範であり、〈近代家族〉意識、ジェンダー意識と言い換えることもできるだろう。つまり、これはこれまで男性に与えられてきた社会規範、家族規範からの離脱を促しているともいえる。男性問題の解決のためにはこれまでの古いジェンダー観や男性中心主義的な家族観からの離脱が必要であるということである。そこで、次に現代までに家族観、家族関係がどのように変化してきているのか詳細に見ていく。また、〈近代家族〉の比較対象として〈近代家族〉の前後に成立したとされる〈直系家族〉〈合意制家族〉についても同様に見ていく。

1.2 家族意識

(1) 〈直系家族〉

日本の明治時代における家族制度は中央集権化を目的とした明治政府に主導される形で制度化された。これまでの分割相続などでバラバラになっていた家族を一つの家として統合させるため、江戸時代の武家の家族制度をモデルとして長男単独相続の父系の〈直系家族〉制度を「家族イデオロギー」として制度化したのである。新律綱領による長男相続性の強制と違反時の罰則追加、徴兵制度での長男、戸主、家長の猶予、分家禁止令の制定、戸籍法の制定、名字の制度化に加え、明治民法によって「家制度」は明確に規定された。このように明治政府によって主導された〈直系家族〉制度であったが国民にもよく浸透し、家族の構成員たちは、家長を中心に「家」の発展に貢献する存在であることが期待されていた。また、家族維持の為の合理的、禁欲的な生活様式の成立の過程でもあった。このように〈直系家族〉は家族の構成員たちの強い所属意識によって成立したのである。（野々山久也 2007）

日本の工業化とともに農地を継承できない次男以下の子供たちは農業から工業へと労働の場を移していたが、これとともに妻（嫁）であった女性の家の中での立ち位置も変化していった。農業従事者の妻であった頃は、農業、家畜の世話、内職、子供の世話、家事な

どのあらゆる作業を行っていたが、夫が給与従事者へとなることによって戸主にとっての安らぎの場でもある家庭を守る、子供の世話や教育を行う役割を持つ主婦へと変化していくようになった。この主婦化も「家イデオロギー」とは無関係ではなく、内助の功で夫を支えることが任務とされたり、長男を育てる母親の役割が強調されたり、家、夫の成功を自己と同一視したり、老親に献身する嫁の役割を持つ「家」の構成員としての役割を持つことがあった。これは良妻賢母主義の出現であり、「男は仕事、女は家事」という女性や家庭内部の私領域化の始まりでもあったとしている（野々山久也 2007）。

(2) 〈近代家族〉

戦後になると明治憲法、民法、相続制度の廃止などの国家の変化とともに家族の形態も変化していくことになるが、この変化の後に成立したのが〈近代家族〉である。しかし、これまでの〈直系家族〉の特徴でもあった単独相続の慣行の持続や長子の老親単独扶養、夫方への名字の変更などの慣習は持続された。一方で1960年代以降になると高度工業化によって農村の次男以下の子供たちは都市部へと移動し、核家族の数が爆発的に増加した。また、高度工業化の時期には三種の神器とも言われたテレビの普及も進み、それによってアメリカ文化の流入も起きていた。テレビの中で描かれるアメリカのホームドラマの様子は当時の日本人にとって鮮烈なイメージを与え、そこに描かれる固定的性別役割分業意識や電化製品に囲まれる生活は理想の家族イメージとなった。このように高度工業化の中であってかつての家意識は薄れていくようになり、夫婦と未婚の子供からなる核家族、夫婦制家族を主に家族として意識するようになった。この変化によって、性別役割分業、ジェンダー意識はより強固なものとなって行った。

また、〈近代家族〉への変化の中で、結婚の形も変化し見合い結婚から自由恋愛からの結婚が増加している。〈直系家族〉での同族組織、家としての家族構成員の結合から自由恋愛の普及によって夫、妻両親族の双方向的、友愛的な情緒的結合への変化でもあった。しかし、夫婦関係においては、その情緒的結合から一度結婚をすればその契約は生涯続き、拘束されるものとして扱われた。契約の解消、離婚には議論の余地もなく不幸というステイグマを与えられてしまうようになった。法外婚を認めず、婚外子を認めず婚姻届によって家族は幸せが保証されるという錯覚に捉われてしまっていた。としている。夫を中心に家族は情緒的結合によって結びつき、家族間に他の情緒が介在することは許されなかった（野々山 2007）。

以上みてきたように、〈近代家族〉は〈直系家族〉制度から時代の変化とともに変化していったが、この〈近代家族〉を家族社会学者、落合恵美子は 1. 家内領域と公共領域との分離、2. 家族構成員相互の強い情緒関係、3. 子ども中心主義、4. 男は公共領域・女は家内領域という性別分業、5. 家族の集団性の強化、6. 社交の衰退とプライバシーの成立、7 非親族の排除、8 核家族であるとしている（落合 1994）。現代のジェンダー意識や家族規範といったものは〈直系家族〉の中で芽吹き、〈近代家族〉の中で強固なものとなって行ったといえるだろう。

(3) 〈合意制家族〉

最後に〈合意制家族〉であるが、これは現代の家族の変化に伴って現れたこれまでの家族社会学の枠組みの中で捉えきれない家族形態を捉える枠組みとして野々山久也が作ったものである。野々山はこれまでの家族が概して一つの集団として存在してきたことに対し、現代では、1「長寿化、死の高齢偏在化による将来予測の可能性の向上」2「情報化による

多様なライフスタイルの導入と既存文化、家族規範の相対化。また、連絡手段の発達に伴う同じ家に居住する必要性の喪失」3「生活水準の上昇とライフスタイル選択の可能性の増加」4「避妊技術、生殖技術の上昇による家族構成の主体的選択の可能性」5「第三次産業中心の産業構造への変化による女性の労働力化」などの社会変動によって現代における家族は

「集団としての家族」というよりは、さまざまなライフコースを生きる複数の個人としての家族成員たちの同調（シンクロナイゼーション）の場としての家族となってきた。つまり家族が、集団の視点というよりは個人の視点に立って、それも個人が主体的かつ任意的に選択する生活するスタイルないしライフスタイルの対象として理解されなければならない存在になりだしてきている。（野々山 2007:212）

として家族のライフスタイルの多様化を指摘している。これまでの核家族中心の社会の中でもライフスタイルを選択し、核家族を選ばない家族は存在していたが、〈近代家族〉規範の中では夫婦と子供の中での情緒的結合が求められていたために、これらの家族は「欠損家族」「逸脱家族」として扱われてきた。しかし、これからの社会にあっては、ライフスタイルとしての家族を自由に選択できる社会にならなければならないとしているのである。（野々山 2007）

また、野々山はこの〈合意制家族〉、家族のライフスタイル化について、様々な調査実例から確認している。兵庫県家庭問題研究所が2003年から4年にかけて行った「成人期親子関係に関する調査」の中での「老後の生活意識」では、「老後の生活は老夫婦だけで暮らすのがよい」という項目に対し、親世代の62.5%が「まったく賛成」もしくは「どちらかといえば賛成」で賛成グループになった一方で、子世代の賛成グループは54.6%に留まり、伝統的な家族規範はむしろ親世代の方が持っていないという結果になり、野々山はこれを伝統的家族規範の相対化を表しているとしている。また、同研究所が1993年に調査を行い、1994年に「祖父母と孫のかかわりに関する調査報告書」として報告された調査では、「孫は心の安らぎになる」という項目に対しては祖父の約85%、祖母の約91%がそう思うとしている一方で「孫育てに積極的に関わりたい」としている割合は祖父母とも3割ほどに留まっている。また、「孫の世話より自分の生活を楽しまたい」という項目に対しては農村部でも都市部でも4割～5割の祖父母がそう思うと回答しており、孫よりも自身の生活を優先していることがわかる。この結果からも祖父母世代の中においてもジェンダー規範への反発と個人的選考による祖父母孫ライフスタイルが育まれているとしている。このように「家族関係のライフスタイル化」は若い子世代に限られた現象ではなく、親世代、祖父母世代においても同様に見られる現象であることがわかる。〈合意制家族〉が現代では広い範囲で見られる家族形態になっていることがわかる。また、夫婦関係の面でも同研究所の1992年の調査では、「結婚時の悩み」の中では「姓を変えること」の項目が夫と比較して妻の方がより高い割合で悩みをもっていたことや、家族ライフスタイル研究会が1992年から1993年にかけて行われた「非婚カップル」を対象とした調査では事実婚の動機として男女ともに「戸籍制度に反対だから」に次いで「夫婦別姓を通すため」であったりする、また、兵庫県家庭問題研究所の2001年、2002年の調査では家族の絆を形成しているものは、これまで「役割としての絆」から「コミュニケーションとしての絆」をより重視していたこと。

また、同研究所の2005年の調査では夫婦間のコミュニケーションの時間が長い夫婦ほど妻の家族に対する満足度は上昇していることがわかってきている。このように、〈合意制家族〉の中では制度としての家族化に拘らず、ここでもライフスタイルとしての家族を選んでいくことがわかってきている。(野々山 2007)

以上みてきたように家族の在り方は時代の流れとともに〈直系家族〉から〈近代家族〉、〈合意制家族〉へと変化してきたこと。その変化とともに社会が男性に期待する役割も同様に変化を続けてきたといえるだろう。男性の「男らしさ」を規定していたのは家族の在り方であったといえるだろう。

2. 研究方法

2.1 調査の概要・対象

本研究では同志社大学の独身男子学生を対象として、質問紙での調査票調査を行った。調査票の回収は講義中若しくは休み時間に記入してもらったものをその場で回収するか、友人にその友人に渡してもらい、記入してもらったものを後日回収して貰うかの方法をとった。最終的には190人から回答を得られた。回答はすべて数値として入力し、統計解析ソフトSPSSを用いて解析を行った。

2.2 用具、指標、調査項目

調査票調査の内容については主に「男性の三傾向」「家族意識」「ジェンダー意識」「基本属性」の4つについて行った。「男性の三傾向」は上述の伊藤公雄が男性の傾向として指摘した「権力志向」「優越志向」「所有志向」の三つを伊藤の著書『男性学入門』(1996年)と伊藤の研究の基になったゴールドバーグの著書『新しい「男」の時代』(1961年)また、その他ジェンダーに関する先行研究を参考にそれぞれの傾向について調査項目を作成した。また、「家族意識」に関しては、「〈近代家族〉意識」「〈直系家族〉意識」「〈合意制家族〉意識」の三類型に分類し、「〈近代家族〉意識」に関する項目に関しては、落合恵子の著書『21世紀家族へ』(1996年)、「〈直系家族〉意識」「〈合意制家族〉意識」に関しては、野々山久也の著書「近代家族パラダイムの革新」(2007年)を参照し、吉岡祐紀(2014)が作成したものを使用した。また、ジェンダー意識に関する項目では山田礼子(2002)を参照して山本有香子(2008)が作成した項目を吉岡(2014)更に手を加えたものを使用した。

男性の三傾向に関しては、三傾向それぞれについて別個に調査しており、「権力志向」については表1の通りに9つの項目から。「優越志向」については表2の通りに13の項目から。「所有志向」に関しては、表3の通りに9つの項目から調査を行っている。また、「所有志向」の項目である「経済的には恵まれなくても、気ままに楽しく暮らせればよいと思う。」「あまり収入はよくなくても、やりがいがある仕事ならそれでよいと思う。」「家族の経済的安定よりも、魅力ある仕事の方が大切だ。」の3つの項目は逆項目であり、それらの項目については分析時に数値を逆転して用いている。これらの男性の三傾向に関する項目には1「そう思わない」2「あまりそう思わない」3「どちらとも言えない」4「ややそう思う」5「そう思う」の5肢から1つ選択する形式になっている。

表 1 権力志向を測る尺度

	そう 思わ ない	あ ま り そ う 思 わ な い	ど ち ら と も 言 え な い	や や そ う 思 う	そ う 思 う
1 自分の考えに従って、人生を形づくるように努力すべきだ。	1	2	3	4	5
2 強い権力がふるえる地位につきたい	1	2	3	4	5
3 自分の意見にはいつも自信がある	1	2	3	4	5
4 他人の意見を受け入れることには抵抗を感じる	1	2	3	4	5
5 自分の意見はできるだけ曲げたくない	1	2	3	4	5
6 自分で行動するよりは誰かに指示をする立場になりたいと思う。	1	2	3	4	5
7 もし友人全員の意見と異なることがあっても、友人に対して自分の意見をはっきり述べる	1	2	3	4	5
8 たとえ良いアドバイスであっても、自分のやっていることにあれこれと言われたくない	1	2	3	4	5
9 責任のある仕事に就きたいと思う	1	2	3	4	5

表 2 優越志向を測る尺度

	そ う 思 わ な い	あ ま り そ う 思 わ な い	ど ち ら と も 言 え な い	や や そ う 思 う	そ う 思 う
1 物事はできるだけ自分一人の力で解決したいと思う。	1	2	3	4	5
2 肉食主義の男性は魅力的ではないと思う	1	2	3	4	5
3 競争で負けることはできるだけ避けたいと思う。	1	2	3	4	5
4 どんなことでも勝利を目指すべきだと思う。	1	2	3	4	5
5 競争で負けることは悔しいと思う。	1	2	3	4	5
6 試験の点数が低いと恥ずかしく思う。	1	2	3	4	5
7 体調不良になっている男性は情けないと思う。	1	2	3	4	5
8 下戸の男性はみっともないと思う。	1	2	3	4	5
9 酒豪の男性は男らしいと思う。	1	2	3	4	5
10 感情的な行動を男性が取るべきではない。	1	2	3	4	5
11 感情的な男性はみっともないと思う。	1	2	3	4	5
12 男性は怒ってもそれを顔に出すべきではない。	1	2	3	4	5
13 父親は子供に対して友人の様に対等の立場から接するのが理想的である	1	2	3	4	5

表 3 所有志向を測る尺度

	そ う 思 わ な い	あ ま り そ う 思 わ な い	ど ち ら と も 言 え な い	や や そ う 思 う	そ う 思 う
1 金銭的に裕福な男性は男らしいと思う	1	2	3	4	5
2 物質的に裕福でありたいと思う。	1	2	3	4	5
3 金持ちであることは良いことだと思う。	1	2	3	4	5
4 家族の経済的安定よりも、魅力ある仕事の方が大切だ。	1	2	3	4	5
5 経済的には恵まれなくても、気ままに楽しく暮らせればよいと思う	1	2	3	4	5
6 この世の中は結局金しいだと思	1	2	3	4	5
7 経済的に豊かでありたい。	1	2	3	4	5
8 あまり収入はよくなくても、やりがいがある仕事ならそれでよいと思う。	1	2	3	4	5
9 お金持ちになりたいと思う。	1	2	3	4	5

次にジェンダー意識であるが、表4の通りに8項目から調査を行っている。また、ジェンダー意識は 1、「当てはまらない」2、「あまり当てはまらない」3、「やや当てはまる」4、「当てはまる」の4肢から選んで回答する形式になっている。

表 4 ジェンダー観を測る尺度

	当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる
1 人から危害を加えられそうになったとき、身を守るにはやはり男でないとだめだと思う	1	2	3	4
2 大地震や火事など緊急事態の時、その場を取り仕切るのは、やはり男でないとだめだと思う	1	2	3	4
3 重いものを運んでもらうとき、やはり男でないとだめだと思う。	1	2	3	4
4 自分が病気や介護を必要とするとき、やはり女性に面倒を見てもらいたいと思う	1	2	3	4
5 健康や生活に関わることがらに敏感なのは女性だと思う。	1	2	3	4
6 子供が病気で苦しんでいるとき、それをわがこととして感じ取れるのは、やはり母親だと思う。	1	2	3	4
7 生活者優先の政治を本当に推し進められるのは、やはり女性議員だと思う。	1	2	3	4
8 子供のちょっとした変化に気づくのはやはり母親だと思う。	1	2	3	4

最後に家族意識であるが、「〈直系家族〉意識」「〈近代家族〉意識」「〈合意制家族〉意識」それぞれについて別個の項目で調査を行っている。まず「〈直系家族〉意識」であるが、表5の通りに5つの項目から。次に「〈近代家族〉意識」では表6の通りに5つの項目から。また、「〈合意制家族〉意識」であるが表7の通りに6つの項目から調査を行っている。これらの3つの項目は1、「当てはまらない」2、「あまり当てはまらない」3、「やや当てはまる」4、「当てはまる」の4肢から1つを回答する形になっている。

表 5 〈直系家族〉意識を測る尺度

	当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる
1 長男は結婚をした後、両親と同居するべきだと思う。	1	2	3	4
2 子供が一人しかいない場合に望む子供の性別は男児である。	1	2	3	4
3 結婚時において、性は夫側の性を選択したいと思う。	1	2	3	4
4 家族を統率する権利は父親(夫)が持ち、長男が相続するべきだと思う	1	2	3	4
5 夫婦で何か方針を決めるときは、お互いの都合・意見を同じくらい優先させるよりどちらかの意見・都合を優先させた方がよい。	1	2	3	4

表 6 〈近代家族〉意識を測る尺度

	当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる
1 家族は何よりもまず、子供のことを第一に優先させるべきだと思う。	1	2	3	4
2 夫婦がいて子供が2、3人いる核家族形態こそ、あるべき家族の姿だと思う。	1	2	3	4
3 結婚において男性に求めるのは「安定した収入と頼りがいのある夫」だと思う。	1	2	3	4
4 結婚において女性に求めるのは「家庭で夫を支えるかわいい妻」だと思う。	1	2	3	4
5 結婚は個人のライフスタイルを優先するよりも、集団としてまとまりを強めるべきだと思う。	1	2	3	4

表 7 〈合意制家族〉意識を測る尺度

	当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる
1 夫婦で何か方針を決めるときは、どちらかの意見・都合を優先させるより、お互いの都合・意見を同じくらい優先させた方がよい。	1	2	3	4
2 家族は集団としてまとまりを強めるよりも、個人のライフスタイルを優先させるべきだと思う。	1	2	3	4
3 老後は老夫婦だけで暮らすのがよいと思う。	1	2	3	4
4 子供が一人しかいない場合に望む子供の性別は女兒である。	1	2	3	4
5 同性の友人など非血縁者であっても一緒に住んで生活している場合は家族であると思う。	1	2	3	4
6 結婚時において、姓を変えることに抵抗がある。	1	2	3	4

最後に基本項目であるが、「年齢」「サークル」「家族と過ごす時間の長さ」「住まいの形態」の4項目である。

また、実際の分析において、男性の三傾向では得られた回答から傾向ごとに信頼性分析を行い、クロンバックの α 係数が最大になるように信頼性の得られなかった一部の項目を削除するなどの処理を行ったうえで分析を行った。

2.3 分析方法

男性の三志向の項目ではそれぞれの回答について回答番号通りに「そう思わない」を1点として、「あまりそう思わない」を2点として、「どちらとも言えない」を3点として、「ややそう思う」を4点として、「そう思う」を5点として扱っており、この値をそれぞれの志向ごとに足し合わせた合計点をそれぞれの志向の得点として扱う。また、上述の「所有志向」での3つの逆項目に関しては数値を逆転し、「そう思わない」を5点、「あまりそう思わない」を4点、「どちらとも言えない」を3点、「ややそう思う」を2点、「そう思う」を1点として扱い、順項目に足し合わせている。つまり、これらそれぞれ合計点の高い人ほど、「権力志向」「優越志向」「所有志向」をより強く持っている人として扱われるということになる。また、ジェンダー意識の項目でも同じように、「当てはまらない」を1点として、「あまり当てはまらない」を2点として、「やや当てはまる」を3点として、「当てはまる」を4点として扱っており、この合計得点の高い人ほど「ジェンダー意識」を強く持っている

る人として扱われる。家族意識の項目でも同様に、それぞれ「〈直系家族〉意識」「〈近代家族〉意識」「〈合意制家族〉意識」について「当てはまらない」を1点として、「あまり当てはまらない」を2点として、「やや当てはまる」を3点として、「当てはまる」を4点として扱っており、この合計得点の高い人ほど「〈直系家族〉意識」「〈近代家族〉意識」「〈合意制家族〉意識」を強く持っている人として扱われる。これらの7つの項目に関して「権力志向」「優越志向」「所有志向」を独立変数として、「〈直系家族〉意識」「〈近代家族〉意識」「〈合意制家族〉意識」「ジェンダー意識」を従属変数として扱って重回帰分析を行った。

3. 調査結果

3.1 回答者の属性

調査は同志社大学の男子学生を対象に行われ、結果的に190人から回答を得ることができた。回答者の年齢は47～18歳でその平均は20.3歳であった。また、回答者の所属学部は社会学部が63名、理工学部が60名、商学部22名、スポーツ健康学部9名、経済学部9名、文化情報学部9名、法学部7名、神学部4名、文学部4名、生命医学部2名、政策学部1名。回答者のサークル所属は回答者の約42%が無所属。約58%が何らかのサークル活動に参加していた。以上のように、年齢、学部、サークル所属と様々なタイプの男子大学生をサンプルとして調査を行うことができたといえるだろう。

3.2 記述統計

「権力志向」「優越志向」「所有志向」「ジェンダー意識」「〈直系家族〉意識」「〈近代家族〉意識」「〈合意制家族〉意識」それぞれについての回答の傾向を見ていく。「権力志向」「優越志向」「所有志向」は質問紙においては上述の通りに1「そう思わない」2「あまりそう思わない」3「どちらとも言えない」4「ややそう思う」5「そう思う」の5段階での評価を行ったが、ここでは1「そう思わない」2「あまりそう思わない」を「そう思わない」に。4「ややそう思う」5「そう思う」を「そう思う」に統合して割合として示していく。

(1) 男性の志向性

a) 権力志向

権力志向に関する項目に対する回答は以下の図1の通りであった。「他人の意見を受け入れることに抵抗を感じる」「たとえ良いアドバイスであっても、自分のやっていることにあれこれと言われたくない。」の項目に対しては特に「そう思わない」の回答がそれぞれ45.8%、30.5%で特に多かった一方で、「自分の考えに従って、人生を形づくるように努力すべきだ」「責任のある仕事に就きたいと思う」の項目に対しては「そう思う」の回答が特に多かった。また、「強い権力がふるえる地位につきたい」「自分の意見はできるだけ曲げたくない」に対する回答も上記2つほどではないが「そう思わない」に対して「そう思う」の回答が20%前後多くなった。

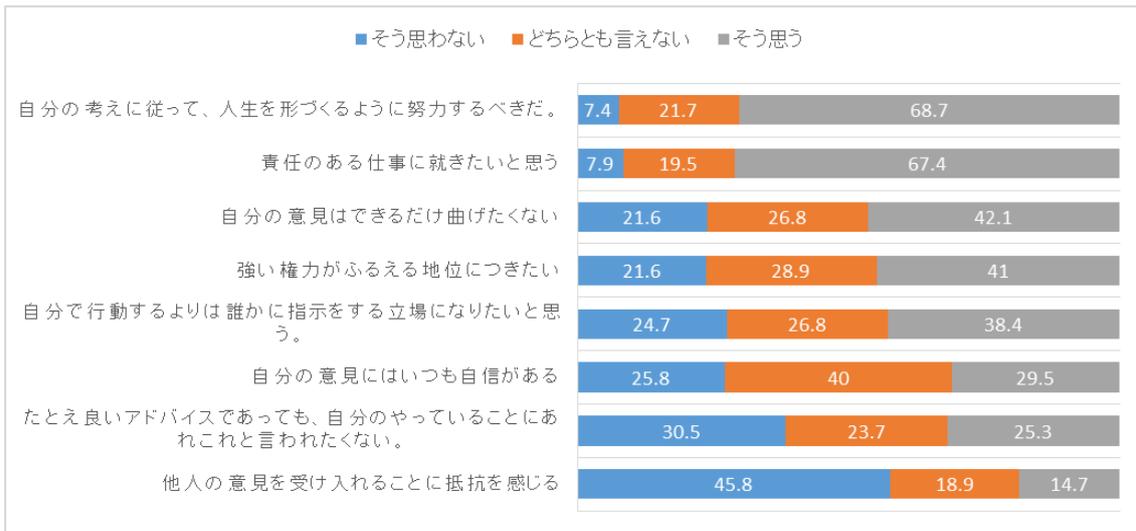


図 1 権力志向に関する項目に対する回答

b) 優越志向

優越志向に関する項目に対する回答は図 2 の通りであった。この中では「競争で負けることは悔しいと思う」「競争で負けることはできるだけ避けたい」「どんなことでも勝利を目指すべきだと思う」「試験の点数が低いと恥ずかしく思う」には「そう思う」の回答がそれぞれ 82.2%、65.8%、65.1%、61.5%と特に高い結果になった。その一方で、「下戸の男性はみっともないと思う」「体調不良になっている男性は情けないと思う」という項目に対する回答は「そう思わない」がそれぞれ 57.3%、59.3%で高くなった。また、「酒豪の男性は男らしいと思う」の項目もそう思わないが 53.1%で「そう思う」に対して 20%以上の差を見せている。それ以外の項目に関しては特に目立った偏りは見せなかった。

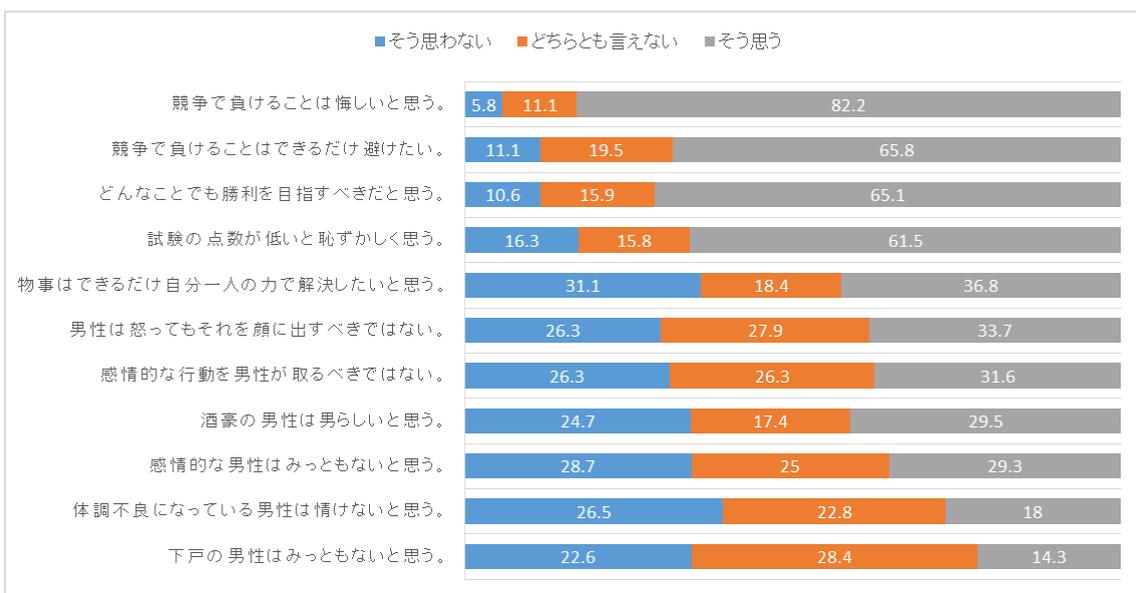


図 2 優越志向に関する項目に対する回答

c) 所有志向

最後に所有志向に関する項目に対する回答は以下の図 3 の通りである。また、上記の逆項目に対する回答は以下の図 4 の通りである。「この世の中は結局金しだいだと思う」「金持ちであることは良いことだと思う」「物質的に裕福でありたいと思う」「お金持ちになりたいと思う」「経済的に豊かでありたい。」の 5 項目はそれぞれ 60.0%、64.7%、77.9%、82.1%、87.9%で特に高い結果になった。逆項目に関しては、「経済的には恵まれなくても、気ままに楽しく暮らせればよいと思う」「あまり収入はよくなくても、やりがいがある仕事ならそれでよいと思う。」の 2 項目は 57.1%、51.6%で「そう思う」の回答が多かった。

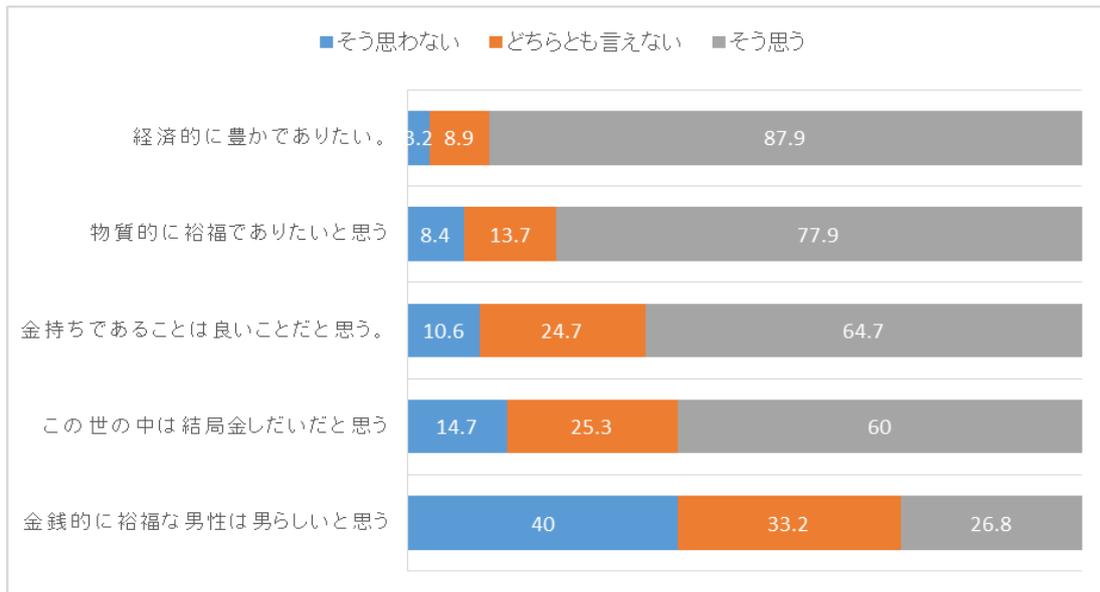


図 3 所有志向に関する項目に対する回答

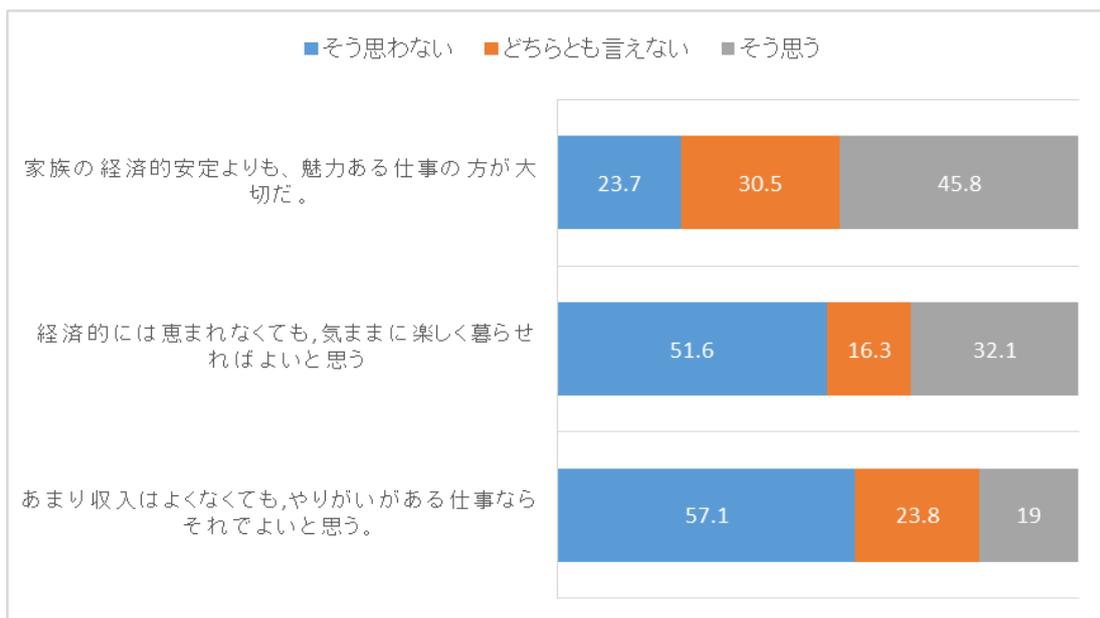


図 4 所有志向に関する項目に対する回答 (逆項目)

(2) ジェンダー意識

次にジェンダー意識に関する項目に対する回答は図5の通りである。「生活者優先の政治を本当に推し進められるのは、やはり女性議員だと思う。」「大地震や火事など緊急事態のとき。その場を取り仕切るのは、やはり男でないだめだと思う。」の2項目は「当てはまらない」「あまり当てはまらない」の回答が「あてはまる」「やや当てはまる」を大きく超えている。しかし、それ以外の項目では「当てはまる」「やや当てはまる」の回答が特に多い結果になった。

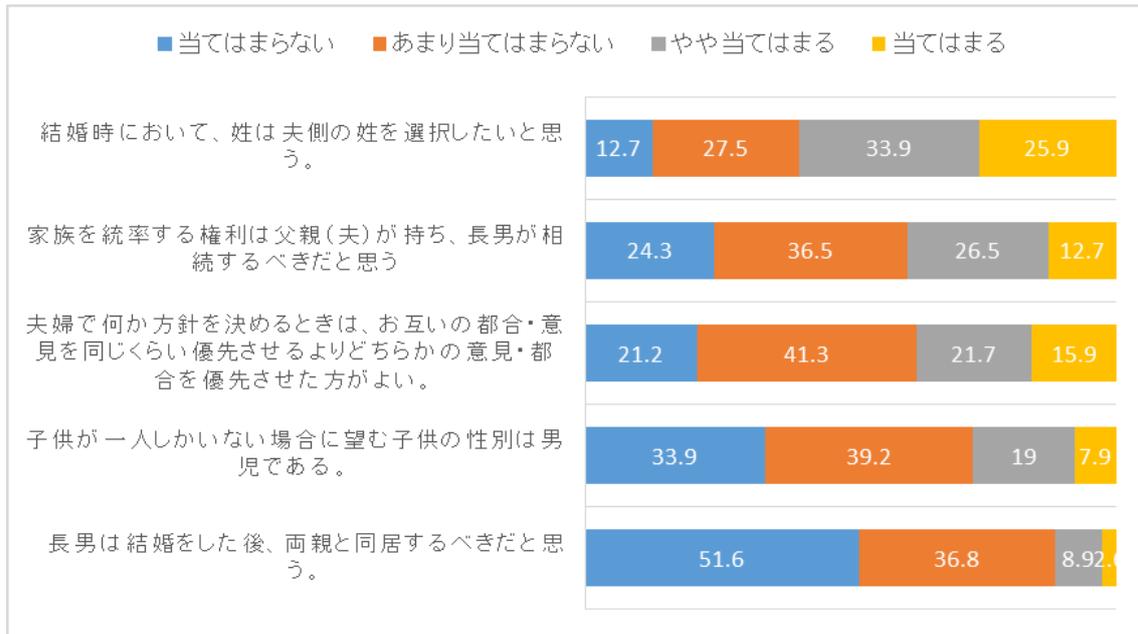


図5 ジェンダー意識に関する項目に対する項目

(3) 家族意識

a) 〈直系家族〉意識

次に家族意識であるが、最初に〈直系家族〉意識から見ていく。〈直系家族〉意識に関する項目に対しての回答は図6の通りであった。〈直系家族〉意識では「結婚時において、姓は夫側の性を選択したいと思う。」の項目に対してのみ「当てはまる」「やや当てはまる」の回答が過半数を超える結果になった。それ以外の4項目に対する回答は「当てはまらない」「あまり当てはまらない」の回答が多く、特に「長男は結婚をしたのち、両親と同居するべきだと思う」では「そう思う」が2.6%「ややそう思う」は8.9%と目立って低い結果になった。また、「夫婦で何か方針を決めるときは、お互いの都合・意見を同じくらい優先させるよりどちらかの意見・都合を優先させた方がよい。」「家族を統率する権利は父親(夫)が持ち、長男が相続するべきだと思う」という項目は肯定的な回答がそれぞれ37.6%、39.2%で比較的多い結果になった。

c) 〈合意制家族〉意識

最後に〈合意制家族〉であるが、〈合意制家族〉に関する項目に対する回答は図8の通りである。「夫婦で何か方針を決めるときは、どちらかの意見・都合を優先させるより、お互いの都合・意見を同じくらい優先させた方がよい。」「同性の友人など非血縁者であっても一緒に住んで生活している場合は家族であると思う。」の項目では「当てはまる」「やや当てはまる」の回答が多かった。しかし、「子供が一人しかいない場合に望む子供の性別は女兒である。」「家族は集団としてまとまりを強めるよりも、個人のライフスタイルを優先させるべきだと思う。」「老後は老夫婦だけで暮らすのがよいと思う。」の項目では「当てはまらない」「あまり当てはまらない」の回答が多い結果になった。また、「結婚時において、姓を変えることに抵抗がある」の項目では回答は半々であった。

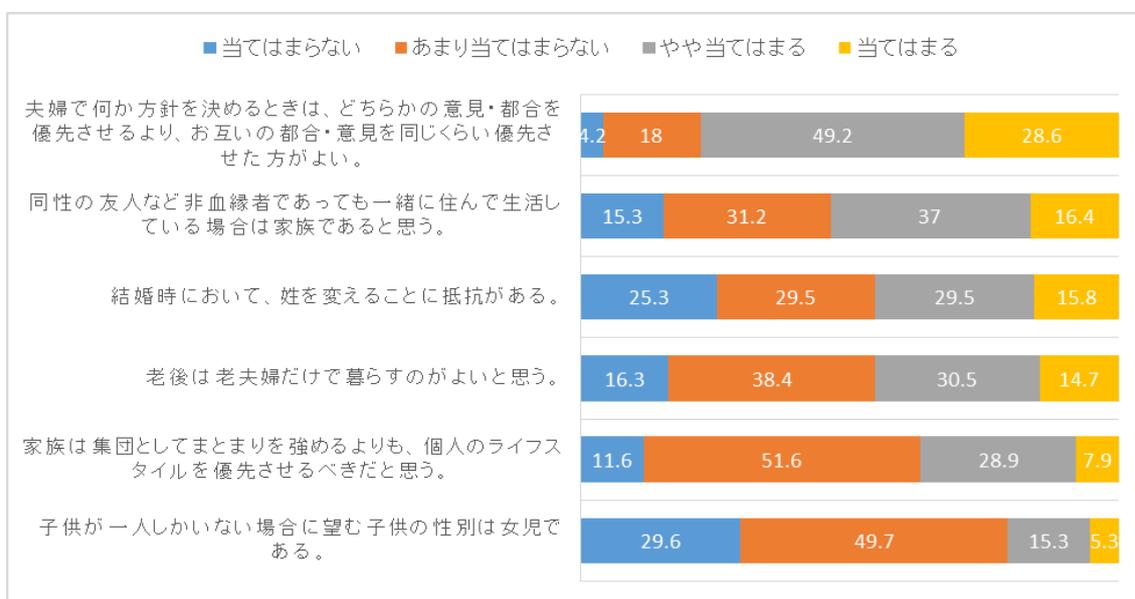


図 8 〈合意制家族〉意識に関する項目に対する回答

3.3 重回帰分析

最後に「権力志向」「優越志向」「所有志向」の男性の三志向を従属変数として、「ジェンダー意識」「〈直系家族〉意識」「〈近代家族〉意識」「〈合意制家族〉意識」を独立変数として、それぞれについて重回帰分析を行った。権力志向との結果が表 8。優越志向との結果が表 9。所有志向との結果が表 10 である。

表 8 権力志向に対する直系・近代家族・合意制家族意識・ジェンダー意識の効果

	非標準化係数		標準化係数
	B	標準誤差	ベータ
(定数)	14.202	2.674	
ジェンダー意識指数	.174	.102	0.154*
直系家族意識指数	.190	.130	.126
近代家族意識指数	.063	.144	.038
合意制家族意識指数	.272	.158	0.131*

表 9 優越志向に対する直系・近代家族・合意制家族意識・ジェンダー意識の効果

	非標準化係数		標準化係数
	B	標準誤差	ベータ
(定数)	15.777	3.488	
ジェンダー意識指数	.333	.135	0.215**
直系家族意識指数	.408	.172	0.198**
近代家族意識指数	.116	.187	.052
合意制家族意識指数	.338	.207	.121

表 10 所有志向に対する直系・近代家族・合意制家族意識・ジェンダー意識の効果

	非標準化係数		標準化係数
	B	標準誤差	ベータ
(定数)	22.003	3.115	
ジェンダー意識指数	.139	.119	.107
直系家族意識指数	.023	.152	.013
近代家族意識指数	.372	.167	0.197**
合意制家族意識指数	.067	.184	.028

それぞれ権力志向では〈直系家族〉意識、〈近代家族〉意識との間に相関関係は見られないが、ジェンダー意識、〈合意制家族〉意識との間の相関関係は 10%水準で有意。優越志向では〈近代家族〉意識、〈合意制家族〉意識との間には相関関係は認められなかったが、ジェンダー意識、〈直系家族〉意識との間の相関は 5%水準で有意。最後の所有志向ではジェ

ンダー意識、〈直系家族〉意識、〈合意制家族〉意識には相関関係は認められなかったが、〈近代家族〉意識とは5%水準で有意であった。次に有意であった変数で単回帰分析を行った結果はそれぞれ権力志向が図9、図10、優越志向が図11、図12、所有志向が図13である。

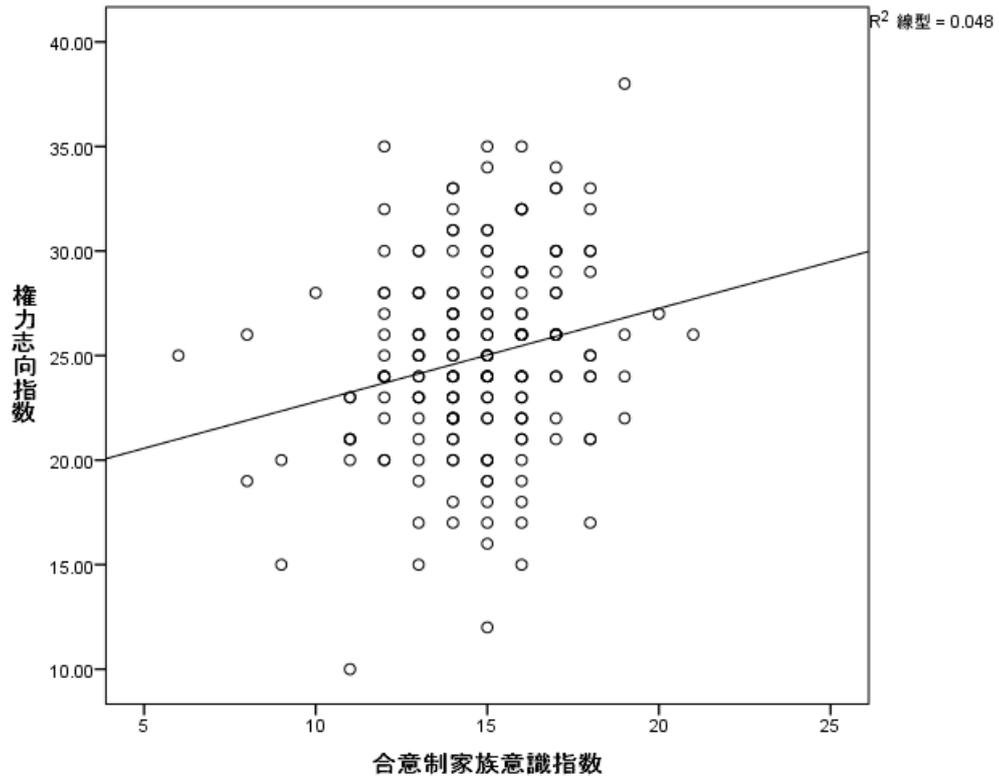


図9 権力志向と〈合意制家族〉意識

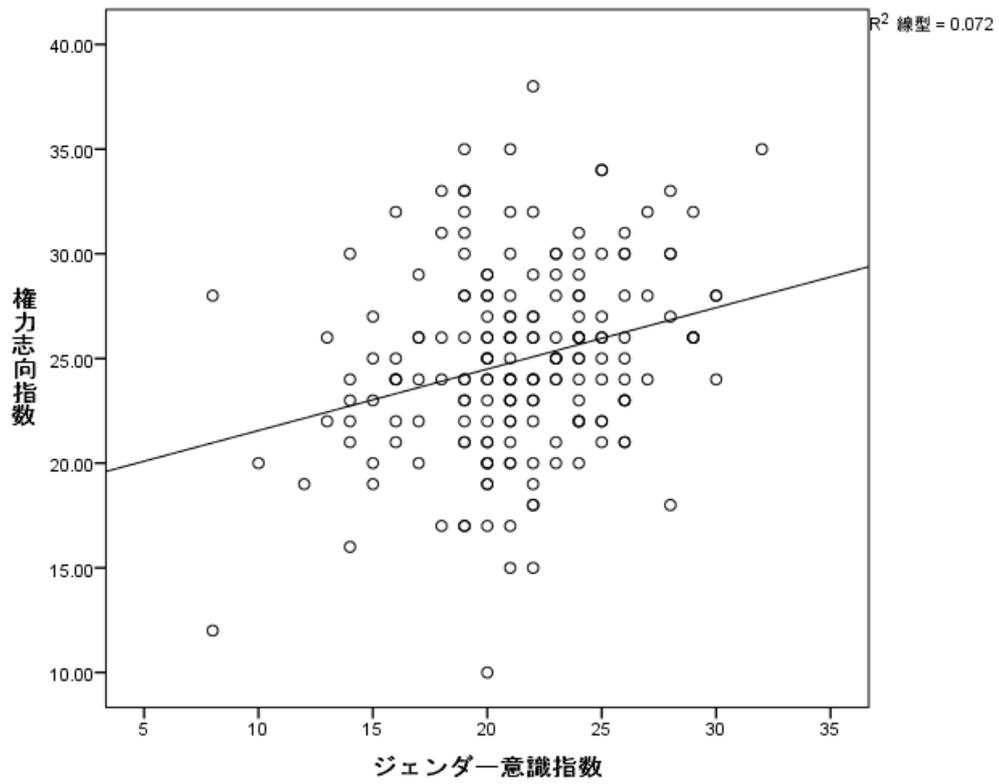


図 10 権力志向とジェンダー意識

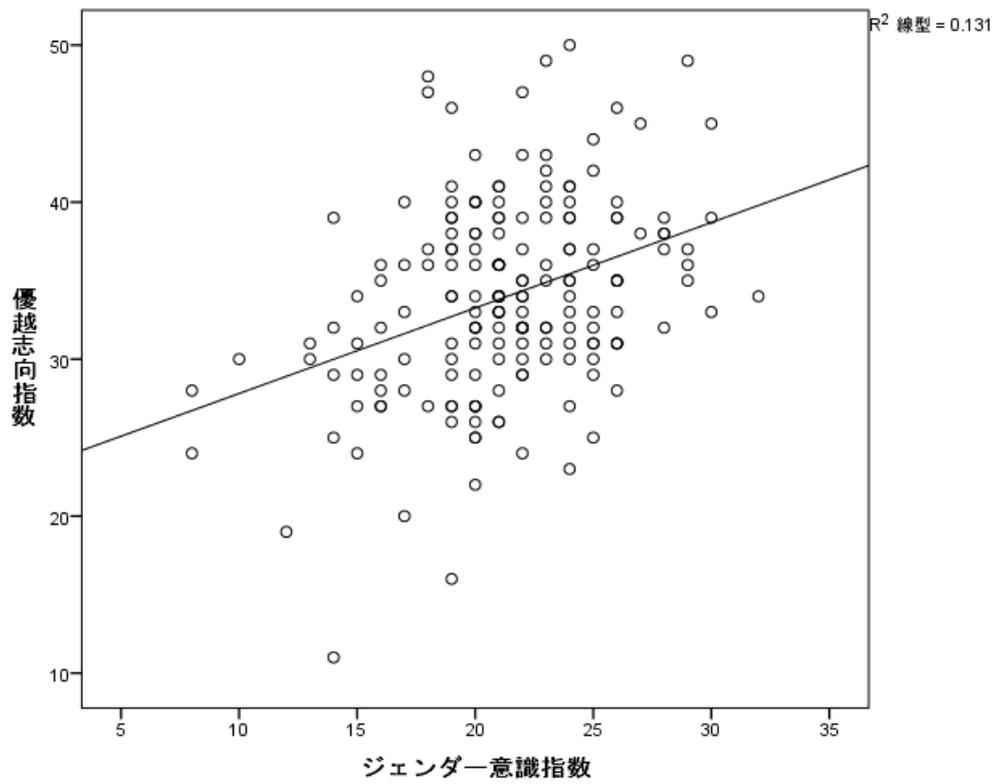


図 11 優越志向とジェンダー意識

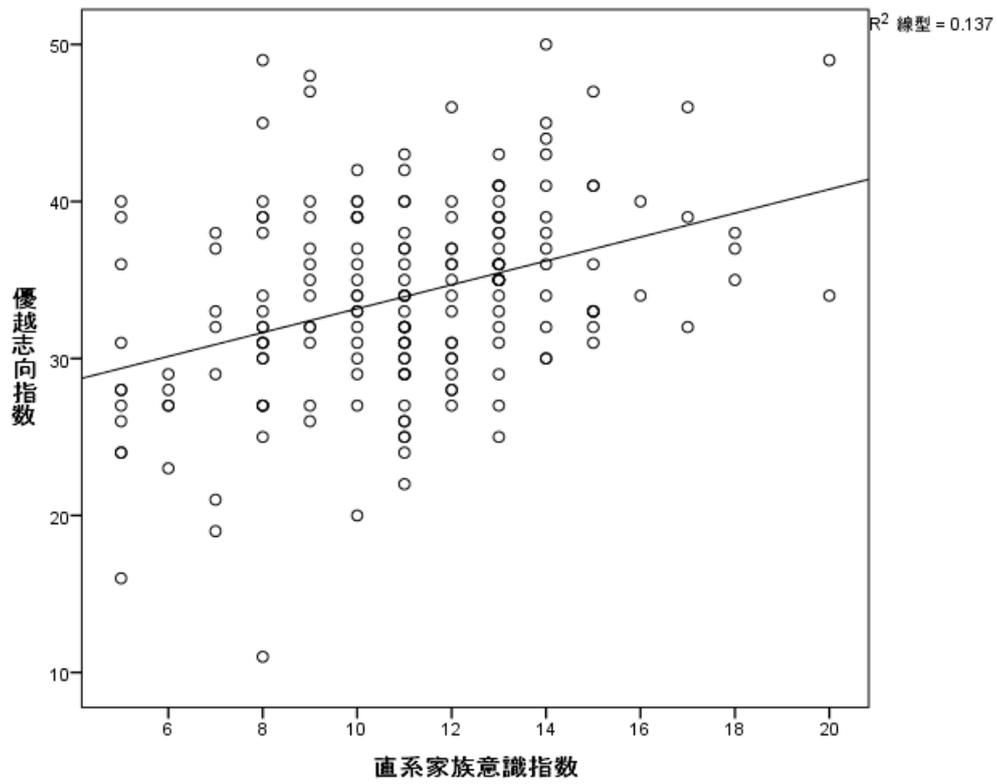


図 12 優越志向と〈直系家族〉意識

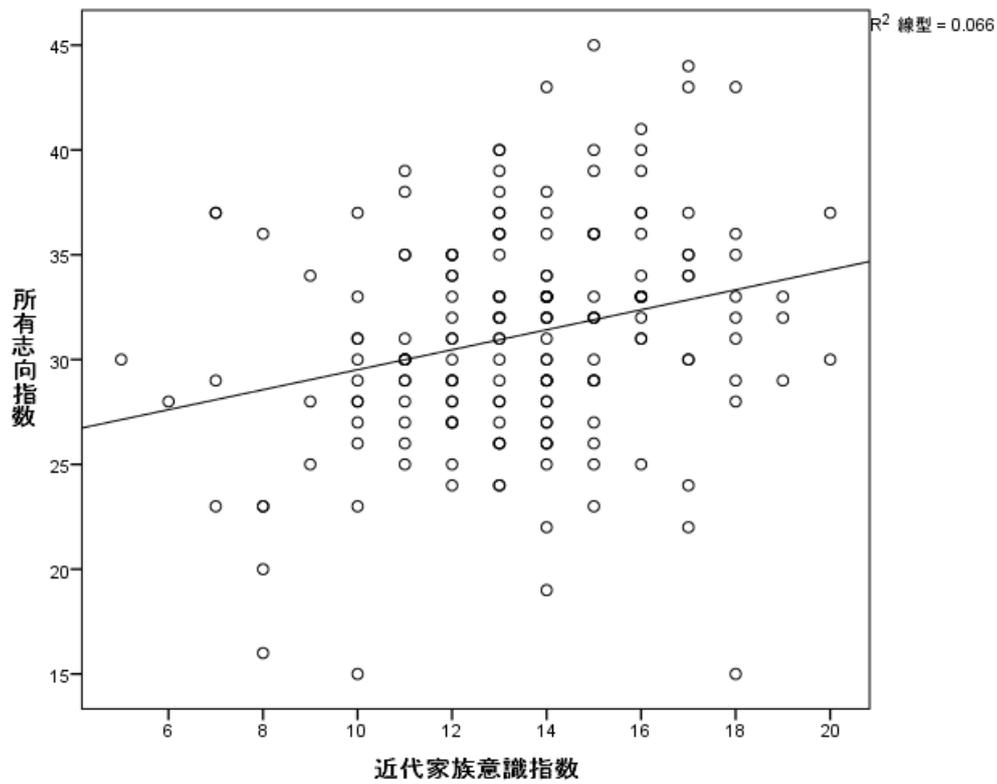


図 13 所有志向と〈近代家族〉意識

いずれの回帰分析の結果を見ても正の相関を示していることがわかる。以上のことから、「ジェンダー意識、〈合意制家族〉意識を強く持っている人ほど、権力志向を強く持っている。」「ジェンダー意識、〈直系家族〉意識を強く持っている人ほど、優越志向を強く持っている。」「近代家族意識を強く持っている人ほど所有志向を強く持っている。」といえるだろう。

4. 考察

4.1 記述統計に関する考察

最後に今回得られた調査結果についての考察を行っていく。まず、ジェンダー意識、家族意識について考えていく。今回の調査対象は男子大学生であったが、ジェンダー観では多くの項目で肯定的な回答が過半数を超えるなど、多くの男子大学生の中でジェンダー観がいまだ持たれているといえるだろう。しかし、「生活者優先の政治を本当に推し進められるのは、やはり女性議員だと思う。」「大地震や火事など緊急事態のとき。その場を取り仕切るのは、やはり男でないだめだと思う。」の2つの項目では回答の傾向が他の項目と比較した時に大きく異なり、否定的な回答が過半数となっていた。この原因としては、2項目と他の項目との違いとしては、問われている状況が考えられるだろう。男子大学生がジェンダー意識を発揮した項目では家族間、親子間の問題に関係した項目であったのに対し、発揮されなかった項目で問われている問題は「災害、問題の発生した時の対応は男性が主導すべきか」「女性の国会議員の方が生活者優先のものをを行うことができるか」というものでこれらは家庭の外の問題であったといえるだろう。男子大学生の中でのジェンダー意識は家庭内では強く発揮されるものの公的な場や役割ではあまり発揮されていないといえるだろう。

次に〈直系家族〉意識であるが、ほとんどの項目では〈直系家族〉意識には否定的な回答が多かった。しかし、「結婚時において、姓は夫側の姓を選択したいと思う。」のみが例外的に肯定的な回答が多かった。また、上述のように否定的な回答が多かった回答の中でも比較的肯定的な回答が多かった項目を見ると家父長制、家の統帥に関する項目であり、4割ほどが肯定的な回答をしている。以上のことから男子大学生の中ではあまり〈直系家族〉意識は持たれていないものの、家父長制のような考えはある程度には持たれている。また、姓のような形式的な部分でも〈直系家族〉意識は、ある程度の「イエ」意識は持たれていたといえるだろう。

次に〈近代家族〉意識である。〈近代家族〉意識の項目では、子供中心主義や、男性の性役割、集団としての家族に関する項目では肯定的な意見が過半数を超えて多く、〈近代家族〉意識は強く見られることがわかった。しかし、女性の性役割、核家族意識は肯定、否定が半々という結果であった。この結果は男子大学生の中で〈近代家族〉意識は比較的強く持たれているものの、女性の側の性役割意識や家族イメージとしての核家族は〈近代家族〉意識の中ではこれまで考えられてきたものと比較して薄いものになっているといえるだろう。男性、自分自身の問題には性役割意識を持っている一方で、女性に対しては性役割をあまり期待してはいないということであり、性役割意識に対する性での非対称性が見られたといえるだろう。しかし、男子大学生が女性の持っていた性役割である子供に対して否定的であるというわけではなく、「家族は何よりもまず、子供のことを第一に優先させるべきだと思う。」には約78%が肯定的な回答をしており、子供中心主義はこれまでと変わらず

持っているのである。このことから男子大学生が子供を持つこと、女性との関係に否定的なわけではないこともわかるだろう。男子大学生の中で〈近代家族〉的な女性と子供を持つことは結びついていないのではないだろうか。

最後に〈合意制家族〉であるが、上述の結果からは男子大学生の中で集団としての家族という意識は根強くあるといえるのではないだろうか。夫婦間ではお互いに意見を尊重しあうことには肯定的である一方で、個人のライフスタイルよりも集団としてのまとまりを優先しているのである。しかし、家族の中身に対しては柔軟な考えを持っているといえるだろう。「子供が一人しかいない場合に望む子供の性別は女兒である。」の項目には否定的な回答が多かったが、〈直系家族〉意識の項目である「子供が一人しかいない場合に望む子供の性別は男児である。」に対する回答の傾向を見ると決して男児を求めているわけではないことがわかるのである。子供の性別自体にこだわりを持っていないと考えられるだろう。また、家族に血縁を必ずしも求めていないことから「家族」に対する柔軟な姿勢が見取れるのである。

ジェンダー観、家族観全体を通してみると〈直系家族〉意識のみが家族観の中ではほとんど見られず、多くの男子大学生がある程度は〈近代家族〉意識、〈合意制家族〉意識、ジェンダー意識をそれぞれ持っていることがわかった。しかし、同じ意識の中でも、項目によって大きく傾向の異なる項目も出現していた。男子大学生はある程度は古い家族意識から抜け出しつつあるものの、自分自身の育ってきた〈近代家族〉的な意識の中で当然視されてきた事柄からは抜け出し切れていないのではないだろうか。〈合意制家族〉的な柔軟さを見せつつも姓の問題や自分自身の性役割からは抜け出せてはいないのである。今の男子大学生は祖父母世代が〈直系家族〉、両親は〈近代家族〉の中で成長してきた世代であり、自分自身が実際に家族を作る段階になって〈合意制家族〉が出現したという複雑な家族観に取り囲まれた世代であると言えるだろう。この世代の家族観は絶対的な一つのモデルで構成されているものではなく、様々な異なる意識の影響を受けて複雑なものになっていると考えられるだろう。男子大学生は〈近代家族〉意識の中でも核家族や男性の性役割分業、子供中心主義、集団としての家族などの〈近代家族〉の特徴を引き継いでいる一方で女性に対しては性役割をそれほど期待していなかったことや、〈合意制家族〉の項目「同性の友人など非血縁者であっても一緒に住んで生活している場合は家族であると思う。」の中では非親族を家族とみなしていることなど一つの3つの家族観がないまぜになっていることがわかるだろう。

次に男性の傾向を見ていく。まず権力志向である。権力志向に対する回答からは男子大学生の中で仕事上での成功、権力の獲得に対する意欲、自分の考えに対する自信などは確かに存在している。しかしその一方で、「他人の意見を受け入れることに抵抗を感じる」「たとえ良いアドバイスであっても、自分のやっていることにあれこれと言われたくない。」「自分の意見にはいつも自信がある。」の項目では肯定的意見は比較的少数であり、自分の考えに絶対的な自信をもってはいないわけではなく、他人の意見や存在に対する期待もある程度持っているといえるだろう。男子大学生は権力志向を所持しているがある程度柔軟なものである。しかし、男子大学生たちが未就職であるという点を考えれば、彼らの権力志向は本人たちにとって現実の問題として認識してはいても本当に具体的なイメージはつかめていないのかもしれない。

次に優越志向である。上述の結果からは、男子大学生の中での結果、競争での勝利に対

する意識の強さ。自分の失敗、競争での敗北をできるだけ避けたいという意識が明確に見られていると言えるだろう。しかし、その一方で飲酒量や体調の問題、感情の表出の問題などはあまり問題にされていないこともわかるだろう。自分自身の努力や競争の問題においては優越志向が発揮されているものの、それではどうしようもないこと、体質、体調には優越志向は発揮されていないといえるだろう。

最後に所有志向である。ほとんどの項目で肯定的な回答の割合が高い結果になり、男子大学生の中で所有志向は見られたといえるだろう。しかし、「金銭的に裕福な男性は男らしいと思う」の項目のみは例外的に否定的な結果になった。また逆項目でも「家族の経済的安定よりも、魅力ある仕事の方が大切だ。」の項目のみが例外的に肯定的な回答が高い結果になった。ほとんどの場合に男子大学生は所有志向を発揮するものの、それは所有志向と男らしさが結びついているのではなく、現実的な問題として金銭や物質的を所有していることは経済的に楽である、よいことであると考えているのではないだろうか。

4.2 重回帰分析に関する考察

最後に重回帰分析の結果について考察していく。今回の重回帰分析の結果、有意な相関を示したのは「権力志向とジェンダー意識、〈合意制家族〉意識」「優越志向とジェンダー意識、〈直系家族〉意識」「所有志向と〈近代家族〉意識」であった。それぞれについて見ていく。

最初に権力志向とジェンダー意識、〈合意制家族〉意識について見ていく。権力志向とジェンダーの相関については、これまでの研究通りの結果であり、シングル男性においても従来の研究と同様の結果を得ることができたといえるだろう。しかし、〈合意制家族〉意識とジェンダー意識との相関は正の相関を示している。ジェンダーフリー的、柔軟な家族意識であるのが〈合意制家族〉であり、これまでの研究とは異なった結果になったといえるだろう。権力志向が強いということは、自分に自信がある、仕事上の地位の向上心が強い、昇進意欲が強いといえるだろう。そのような男性たちにとっては、家族に捉われたい、紐帯の緩い、パートナーの女性が自立している〈合意制家族〉の方が自分にとって都合のよいもののように感じるのではないだろうか。つまり、この結果は女性のジェンダーの問題や、社会進出の影響ではなく、男性自身の問題ではないだろうか。実際にジェンダー観の項目では多くの男性は古いジェンダー観に肯定的な意見を持っていることが確認できているのである。権威を求める男性にとっては自分に「家庭を支える一家の大黒柱」としての役割を求め、自身の栄達の妨げになりうる紐帯の強い〈直系家族〉、〈近代家族〉の家族形態は不都合なものであり、紐帯が緩く、家族の在り方を規定しない〈合意制家族〉の在り方の方が魅力的に思われているのではないだろうか。権威を求めるシングル男性たちはジェンダーフリー意識などから〈合意制家族〉を支持しているのではなく、実際に落合の紹介している「新しい男性」のように妻子を養うという役割から逃れようとしているのかもしれない。

次に、「優越志向とジェンダー意識、〈直系家族〉意識」である。この結果はこれまでの男性、家族研究と比較的近い結果になったと言えるだろう。〈直系家族〉意識の中で男性は「イエ」の長として、「家庭を支える一家の大黒柱」として、優秀でなくてはならないという意識が社会的にも持たれていたことから優越志向と〈直系家族〉意識が相関を持っていることは妥当な結果であるといえるだろう。実際に優越志向の回答結果では能力として

有能であることに対する意識は強く見られているのである。しかし、その一方で体質や体調などの面では意識されてはいなかった。男子大学生の〈直系家族〉意識では従来のイメージの中での「家庭を支える一家の大黒柱」としての男性イメージとは部分的には異なるものになっているのではないだろうか。また、ジェンダー意識との相関であるが、性役割分業意識の中で女性に対して優位であろうとする意識。「家庭を支える一家の大黒柱」として精神的、肉体的、に優れた男であろうとする意識。経済的な面で豊かであるために有能であろうとする意識と考えられるだろう。

最後に「所有志向と〈近代家族〉意識」である。この結果もこれまでの男性、家族研究と同様の結果になったといえるだろう。この結果であるが、男子大学生たちにとってこの〈近代家族〉の在り方は最も身近に感じられる、リアルに感じられる家族の在り方なのではないだろうか。自分自身の実際の今の家族イメージの中で現実の問題として金銭の重要性というものを認識していることで、〈近代家族〉意識を強く持っていることで所有志向も強く持つようになっていないだろうか。つまり、〈近代家族〉意識は他の家族意識と比較したときにより実際的なもの。リアルなものとしてとらえられることによって金銭や物質的なものに対する意識が強く持たれ、所有志向につながっているのではないだろうか。他の男性の志向性においてはジェンダー観との相関を示したが、この所有志向にのみが相関を示さなかった。所有志向を引き起こしているものは、ジェンダー観、性役割分業意識などではなく、他の男性の傾向とは異なる文脈で説明されるものなのではないだろうか。〈近代家族〉意識の中でも「結婚において女性に求めるのは「家庭で夫を支えるかわいい妻」だと思う」の項目に対する肯定的回答は比較的少なかったことから男性の所有志向は女性ではなく、金銭、物質に向かっているといえるのではだろうか。

終章

以上みてきたように男性の三傾向は家族観、ジェンダー観によって大きな影響を受けているということ。社会的に男性に求められている役割の変化、男性を取り巻く環境の変化によって男性の行動や意識は規定されているということが言えるだろう。男性の家族観の違いによって男性の意識も変化している。男性の意識の問題とは、ジェンダーの間だけにとどまらない問題、家族の問題でもあるということができよう。そうであるのならばこれからの時代、〈合意制家族〉の。一定の家族観がない。画一的でない、個人が家族を選択する時代においては男性の問題は現在以上に目に見えないものになってしまうのではないだろうか。一定の家族観が失われつつある以上家族の在り方から男性全般の意識傾向を推し量ることはできないのである。これからは男性も個人として注視されなければならないだろう。

また、今回の調査対象はシングル男性であったが、先行研究での男性の三傾向はいずれのものも見られていたなど、比較的従来の研究と近い結果になったといえるだろう。シングル男性であることで特定の男性の傾向が見られなくなることはなかった。今後の課題としては、既婚男性、有職男性でもこのような結果。男性の傾向は家族観に影響されるという結果が得られるのかというものがあろう。男性観が家族観によって実際に自分の家族を持つことによって規定されているのなら既婚男性においてはシングル男性とは異なる傾向がみられるのではないだろうか。また、男性の志向性においては職業の有無に関係があるのではないかという推測もある。有職シングル男性と比較研究を行うことで異なる傾

向を得られるのではないだろうか。

最後に本論文執筆にあたり調査にご協力いただいた同志社大学の学生の方々、ご指導いただいた立木教授。データ分析、執筆の相談に乗っていただいた研究室の松川助教授。本当にありがとうございました。

参考文献

- 落合恵美子, 1994, 『21 世紀家族へ 第 3 版』, 有斐閣選書
- 野々山久也, 2007, 『現代家族のパラダイム革新——直系制家族・夫婦制家族から合意制家族へ』, 東京大学出版会.
- 伊藤公雄, 1996, 『男性学入門』 作品社
- 2010, 『新訂ジェンダーの社会学』, 放送大学教育振興会
- Goldberg, Herb, 1979, *The New Male: From Self-Destruction to Self-Care*, NewYork: The New American Library. (=1983, 岩田静治訳『新しい「男」の時代』, PHP 研究所)
- 山田昌弘, 1994, 『近代家族のゆくえ——家族と愛情のパラドックス』, 新曜社
- 吉岡佑紀, 2015, 『女性の拒食・過食を生み出す社会構造——〈ジェンダー〉と〈近代家族〉の視点から』, 立木茂雄研究室, (2015 年 12 月 21 日取得, <http://www.tatsuki.org/>).
- 小木曾道夫, 2012, 『SPSS によるやさしいアンケート分析 第 2 版』, オーム社
- 小寺平治, 2013, 『ゼロから学ぶ統計解析』, 講談社

「独身男性の持つ男性観調査」へのご協力をお願い

皆さまは益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、私は卒業論文で男性、特に独身男性の持つ男性観をテーマに調査研究を行っております。

この研究の為男子学生の皆様のご意見をお聞かせいただきたく、アンケート調査を行っております。

皆さまからの回答は学術的なデータとして卒業論文での研究目的にのみ用います。集計処理の基に使用しますので個人の回答の秘密は厳守されます。皆様にご迷惑をおかけすることは決してございません。

以上の趣旨をご理解いただき、何卒調査にご協力くださいますようお願い申し上げます。

平成 27 年 10 月 13 日

同志社大学社会学部社会学科

高橋 理

Tel:080-5480-7704

Mail:bsm1063@mail2.doshisha.ac.jp

1 そう 思わ ない	2 あまり そう思 わない	3 どちら とも言 えない	4 やや そう 思う	5 そう 思う
---------------------	------------------------	------------------------	---------------------	---------------

1. 経済的には恵まれなくても、気ままに楽しく暮らせればよいと思う

1 2 3 4 5

2. この世の中は結局金しだいだと思う

1 2 3 4 5

3. 強い権力がふるえる地位につきたい

1 2 3 4 5

4. 自分の意見にはいつも自信がある

1 2 3 4 5

5. 他人の意見を受け入れることに抵抗を感じる

1 2 3 4 5

6. 自分の意見はできるだけ曲げたくない

1 2 3 4 5

7. 競争で負けることはできるだけ避けたい。

1 2 3 4 5

8. どんなことでも勝利を目指すべきだと思う。

1 2 3 4 5

9. 試験の点数が低いと恥ずかしく思う。

1 2 3 4 5

10. 体調不良になっている男性は情けないと思う。

1 2 3 4 5

11. 物事はできるだけ自分一人の力で解決したいと思う。

1 2 3 4 5

12. 下戸の男性はみっともないと思う。

1 2 3 4 5

1 1 そう 思わ ない	2 2 あまり そう思 わない	3 3 どちら とも言 えない	4 4 やや そう 思う	5 5 そう 思う
--------------------------	-----------------------------	-----------------------------	--------------------------	--------------------

1 そう 思わ ない	2 あま りそ う思	3 どち らと も言 えない	4 やや そう 思う	5 そう 思う
---------------------	---------------------	----------------------------	---------------------	---------------

- | | | | | | |
|-------------------------|---|---|---|---|---|
| 13. 酒豪の男性は男らしいと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 14. 父親に悩みを打ち明けられたいと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 15. 感情的な行動を男性が取るべきではない。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 16. 感情的な男性はみっともないと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

-
- | | | | | | |
|--|---|---|---|---|---|
| 17. 男性は怒ってもそれを顔に出すべきではない。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 18. お金持ちになりたいと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 19. たとえ良いアドバイスであっても、自分のやっている
ことにあれこれと言われたくない。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 20. 金持ちであることは良いことだと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

-
- | | | | | | |
|--|---|---|---|---|---|
| 21. 自分で行動するよりは誰かに指示をする立場になりたい
と思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 22. 父親は家族の為にはどんなことでも我慢する
べきだと思う | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 23. もし友人全員の意見と異なることがあっても
自分の意見をはっきり述べる。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 24. 物質的に裕福でありたいと思う | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

1 1 そう 思わ ない	2 2 あま りそ う思	3 3 どち らと も言 えない	4 4 やや そう 思う	5 5 そう 思う
--------------------------	--------------------------	---------------------------------	--------------------------	--------------------

1 そう 思わ ない	2 あまり そう思 わない	3 どちら とも言 えない	4 やや そう 思う	5 そう 思う
---------------------	------------------------	------------------------	---------------------	---------------

- | | | | | | |
|---------------------------------------|---|---|---|---|---|
| 25. 金銭的に裕福な男性は男らしいと思う | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 26. あまり収入はよくなくても、やりがいがある仕事ならそれでよいと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 27. 家族の経済的安定よりも、魅力ある仕事の方が大切だ。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 28. 自分の考えに従って、人生を形づくるように努力するべきだ。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

-
- | | | | | | |
|-------------------------|---|---|---|---|---|
| 29. 菜食主義の男性は魅力的ではないと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 30. 経済的に豊かでありたい。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 31. 競争で負けることは悔しいと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 32. 責任のある仕事に就きたいと思う | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

1 1 そう 思わ ない	2 2 あま りそ う思 わな い	3 3 どち らと も言 えな い	4 4 やや そう 思う	5 5 そう 思う
--------------------------	-------------------------------------	-------------------------------------	--------------------------	--------------------

1 当てはまらない	2 あまり当てはまらない	3 やや当てはまる	4 当てはまる
--------------	-----------------	--------------	------------

- | | | | | |
|--|---|---|---|---|
| 1. 人から危害を加えられそうになったとき、身を守るにはやはり男でないとだめだと思う | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 2. 大地震や火事など緊急事態のとき。その場を取り仕切るのは、やはり男でないとだめだと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 3. 重いものを運んでもらうとき、やはり男でないとだめだと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 4. 自分が病気や介護を必要とするとき、やはり女性に面倒を見てもらいたいと思う | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ----- | | | | |
| 5. 健康や生活に関わることがらに敏感なのは女性だと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 6. 子供が病気で苦しんでいるとき、それをわがこととして感じ取れるのは、やはり母親だと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 7. 生活者優先の政治を本当に推し進められるのは、やはり女性議員だと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 8. 子供のちょっとした変化に気づくのはやはり母親だと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ----- | | | | |
| 9. 長男は結婚をした後、両親と同居するべきだと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 10. 子供が一人しかいない場合に望む子供の性別は男児である。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 11. ケツコン時において、性は夫側の性を選択したいと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 12. 家族を統率する権利は父親（夫）が持ち、長男が相続するべきだと思う | 1 | 2 | 3 | 4 |

1 女が相続する	2 男女が相続する	3 男が相続する	4 男が相続する
-------------	--------------	-------------	-------------

1 当てはまらない	2 あまり当てはまらない	3 やや当てはまる	4 当てはまる
--------------	-----------------	--------------	------------

- | | | | | |
|--|---|---|---|---|
| 13. 夫婦で何か方針を決めるときは、お互いの都合・意見を同じくらい優先させるよりどちらかの意見・都合を優先させた方がよい。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 14. 家族は何よりもまず、子供のことを第一に優先させるべきだと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 15. 夫婦がいて子供が2、3人いる核家族形態こそ、あるべき家族の姿だと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 16. 結婚において男性に求めるのは「安定した収入と頼りがいのある夫」だと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |

-
- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 17. 結婚において女性に求めるのは「家庭で夫を支えるかわいい妻」だと思う | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 18. 結婚は個人のライフスタイルを優先するよりも、集団としてまとまりを強めるべきだと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 19. 夫婦で何か方針を決めるときは、どちらかの意見・都合を優先させるより、お互いの都合・意見を同じくらい優先させた方がよい。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 20. 家族は集団としてまとまりを強めるよりも、個人のライフスタイルを優先させるべきだと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |

-
- | | | | | |
|--|---|---|---|---|
| 21. 老後は老夫婦だけで暮らすのがよいと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 22. 子供が一人しかいない場合に望む子供の性別は女兒である。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 23. 同性の友人など非血縁者であっても一緒に住んで生活している場合は家族であると思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 24. 結婚時において、姓を変えることに抵抗がある。 | 1 | 2 | 3 | 4 |

1 い な ら な い	2 い な ら な い が あ る	3 あ ら ま り あ る	4 あ ら ま り あ る
----------------------------	---	---------------------------------	---------------------------------

